

あけぼの会奨励賞

「お母さんが乳がんになったとき」

中野 秀子（なかの・ひでこ）

53歳／看護師／福島県

突然の母からの電話、「悪性なんだって」と母の淡々とした声、「えっ！！」思わず言葉に詰まり「早期らしいから」と言う言葉に励ます私のほうが、救われた気持ちになってしまった。「早期なら大丈夫だよ」と言う、一言を掛けるのに精一杯だった。ましてや、これからがん一人で立ち向かっていかなければならない母へ、「頑張って」と言うには、はばかられその言葉を呑み込む自分がいた。そして、その告知の席に同席していなかったことを、詫びた。そして、術後「頑張ったね、お母ちゃん、早期で、転移も無いって、安心してね」と、いう言葉を掛けることしかできなかった。

あれから十五年、幸をなし転移することも無く、自分の趣味に生きている母を見るにつけ、安堵の日々が、続いている。しかし、術後の母は、がんになった自分を、受け止めようと躓き、精神的に落ち込んだり『これからどのくらい生きられるだろうか』『転移しないだろうか』と、自問自答しつつ、不安に打ち勝つのに必死だったように思う。こんな時、家族ができるのは、不安にしている時に、その不安を真正面から受け止め、見守り、ことある事に悩みを聞くことだけだったように思う。今、思う事は、早期発見で転移も無く、術後経過が、良かった事が、現在につながり、彼女は、もちろん家族である私たちにも『生きられるだろうか』の不安を『生きられる』と言う自信へ導いてくれたものと信じて疑わない。

私は、年に一度マンモグラフィ検診へ行く、だが、スムーズに、マンモグラフィ検診を受けたのではない。「受けなくちゃ」と、決心してから二年位たったある日、友に、「はじめてだし、少し、恥ずかしいよね、それに少し痛いらしいよ」と、吐露すると、すぐに「私も一緒に行くよ」と、言ってくれた。今では、検診へ行く勇気をくれた友に感謝している。その友と一緒に、はじめて訪れた時の医師の「お母さんは、自分の大切な身体で身をもって早期発見の大切さを教えて下さったんですね。来てくれて有りがとう」の言葉を掛けられたことが、脳裏を離れない。来て良かったと、思った瞬間だった。

今年もまた、マンモグラフィ検診を、受ける時期となり、友と二人出掛けた。そして、医師からの『大丈夫でしたよ』と言う“安心のおみやげ”を頂き、健康であることへの感謝と幸せな気持ちで、家路に着くことが、できた。そして、私たちが、「また来年も、マンモグラフィ検診へ行こうね」と、約束を交わしたことは、言うまでもない。